70 年安保とベ平連

── 『週刊アンポ』を中心に ──

福井　優
立命館大学大学院文学研究科博士後期課程
立命館大学国際平和ミュージアム平和教育研究センターリサーチアソシエイト

1 章　はじめに

> 一人ひとりが自由で自主的に参加し、無限のひろがりをひめてまきおこされる「人間の渦巻」。そこにこそ、古いデモクラシーに対置される「空間」、新しいデモクラシーの広場があるのではないだろうか[1)]。

政治学者の神島二郎は、1969 年 6 月の時評で、新たに創刊されたある週刊誌をこのように評している。神島が、新たなデモクラシーの在り方として期待を掛けた週刊誌とは、1969 年 6 月から 1970 年 6 月にかけて半年間だけ発行された『週刊アンポ』だ。『週刊アンポ』は、「ベトナムに平和を！」市民連合（ベ平連）の中心的存在である東京ベ平連を母体とする有限会社・週刊アンポ社が、反安保運動の一環として、日米安保条約の固定期限である 1970 年 6 月までを目途に創刊した週刊誌である。隔週刊で全 16 号が発行された[2)]。

『週刊アンポ』は、反戦市民団体が発行した初めての市販の週刊誌であると共に[3)]、その斬新な誌面が、当時大きな話題を呼んだ。毎号、1960 年代末を代表する新進気鋭の小説家が短編小説を寄せ、前衛芸術家が表紙のデザインを担当した。誌面には、論壇誌で活躍する知識人やベ平連の有力なメンバーの文章だけでなく、多くの無名の市民からの投稿も掲載されていた。まさにカオスな雑誌であった『週刊アンポ』は、1960 年代末の社会運動の中でも画期的な試みの一つであったといえるだろう。しかし、これまでのベ平連研究[4)] において、『週刊アンポ』は参照されることの多い重要な資料ではあるものの、その内容を詳細に検討した研究は、ほとんどなかった。管見の限り『週刊アンポ』自体を論じた研究として、服部訓和の研究が唯一ある。服部は『週刊アンポ』を概括的に捉え、種々雑多な記事が投げ込まれた統一されない無秩序な「ヌエ的状態」から、相互のコミュニケーションと「人間の渦巻」がつくり出されたと指摘する[5)]。服部の指摘は、『週刊アンポ』のエッセンスを抽出しようと努めており、傾聴に値する。しかし、掲載されている記事の検討が不十分であると同時に、雑誌の背後にある発行人兼編集長であった小田実（1931 ～ 2007）の思想や、ベ平連運動における『週刊アンポ』の位置付け及び、その意義が明らかにされていない。そのため、『週刊アンポ』の 1960 年代末における社会への広がりやその可能性を十分に捉えきれていないうらみがある。

したがって本稿では、資料の内容の詳細を報告すると共に、『週刊アンポ』が、反安保という大きな政治的目標に向かって、どのように人と人とを結び付けていったのか、「人間の渦巻」（『週刊アンポ』0 号表紙。以下、号数・頁数のみを表記）をつくり出していったのか、を明らかにする。換言すれば、それは『週刊アンポ』を通じて、どのように「新しいデモクラシーの広場」がつくり出される可能性があったのか、という問題を問うことでもある。また、

これまでのベ平連を対象とする先行研究を踏また上で、『週刊アンポ』をベ平連運動の流れの中に位置付ける。

2章　『週刊アンポ』とは何か

1節　創刊までの道のり

まず、本章では、『週刊アンポ』の創刊までの経緯や、運営及び編集の体制、流通過程といった基本的な事柄をみていきたい。

『週刊アンポ』の創刊を発案したのは、ベ平連の代表を務めていた作家の小田実だった。小田がこのような考えを持つに至った背景には、日米安保条約の自動延長が1970年6月に迫るなか、盛り上がりに欠く日本の反戦・反安保運動に対する危機感があった。この状況を打破するためには、「地道な運動のほかに、新しい要素を入れなければならない」と考え、反戦と反安保のための週刊誌の発行を思い付く[6]。小田は『週刊アンポ』の目的を次のように語っている。

> これ〔『週刊アンポ』〕がやっていくことというのは、日本国内に散在している反戦・反安保行動グループの連関を計っていくことと、日本国内だけでなく、日米安保条約というのは日本とアメリカの条約なのだから、アメリカの運動とも連絡をとりあって日本の運動を結びつけてゆきたい。／秋からこの「アンポ社」から週刊誌を出そうと思う。「週刊アンポ」というのを。この週刊誌の目的というのは運動を形成するためです。〔……〕／ほんとうはテレビを利用したいんですが、それだけの金がないので週刊誌を出していくわけです。このことによって国民のなかにひとつのムードをつくっていき、ときどき愛読者集会を開くことによって、運動を急速に大きくしていきたい。と同時にこの週刊誌はコミュニケーションの手段になるわけです[7]。

『週刊アンポ』は、国内外に散在する様々な人々によって繰り広げられている反戦・反安保運動を結び付け、それを全国規模の運動に発展させる「活字の弾丸」（0号表紙裏）として構想されたのである。

このような小田の考えを受け、1969年2月1、2日に開かれた第3回ベ平連全国懇談会で、『週刊アンポ』の創刊とそれを編集・発行する週刊アンポ社の設立が認められる[8]。1969年のベ平連全国懇談会は51グループ、約120人が参加し、ベ平連が70年安保に主体的に取り組み、全国的な反安保運動のうねりをつくり出していくことが確認された。その具体的な行動として、反安保運動を展開する様々な市民運動グループを結集する全国的な連絡調整機関を創設すると共に、『週刊アンポ』とそれの読者集会を通じて、反安保の世論を広範に喚起していくことが計画された。また同会では、「反戦のための万国博（ハンパク）」の開催も承認されており、『週刊アンポ』と「ハンパク」は、1969年のベ平連が全国規模で取り組む主要な行動であった[9]。

全国懇談会での承認を得て、創刊のための準備が、東京ベ平連を中心に本格化する。東京ベ平連は、小田を社長として有限会社・週刊アンポ社を設立し、その事務所を東京ベ平連と同じ渋谷区神宮前3-31-18に置いた（後に新宿区神楽坂6-44に移動）。そこで、原稿の依頼や資金の調達、印刷所の手配、販売網の構築など、週刊誌発行のための準備が一から進められた[10]。

そして6月11日の記者会見で、『週刊アンポ』の創刊が発表され[11]、翌日に0号（創刊準備号）が発行される。B5判24頁の0号は、いわばパイロット版で、取次店を通さず街頭で100円以上のカンパをした人に配布された。実際に、発行日に開かれた「反安保→街へ　週刊アンポ発足記念　ベトナム反戦・反安保のための6月行動月間参加ベ平連講演会」と、6月15日の日比谷野外音楽堂での集会で手売りされたほか、大阪・福岡・京都・札幌・名古屋の各地域ベ平連にも送付され、地域のデモや集会で販売された[12]。このようにして全国に広がった0号は好評を博し、増刷を重ね13万部を売り上げた[13]。週刊アンポ社には読者から「週刊

アンポを街頭カンパの時もっていきました。たいへんな人気で、いつもの何倍ものカンパが集まりました」、「送っていただいた週刊アンポ20部、社内でひっぱりだこです。そして私たちは行動する読者の会を作ることになりました。あと30部すぐ送って下さい」といった喜びの声が届いた[14]。

順調な滑り出しをみせたかに思われたが、11月の創刊までには警察からの妨害と思われる事件も起った。10月11日に、警視庁公安部外事第一課によって、東京べ平連及び週刊アンポ社の事務所が、家宅捜索を受けた[15]。また、同じ頃に印刷を引き受ける予定であったA印刷と大日本印刷が、不可解な理由で契約を唐突に断ってきた[16]。この事件で、週刊誌の発行という計画自体が座礁しかけたが、カタログ社との契約が成立し、難を乗り切った（6号72頁）。このような事情から当初9月に予定されていた1号（創刊号）の発行は、佐藤栄作首相訪米の11月17日となった。こうして紆余曲折を経て創刊された『週刊アンポ』は、これより隔週刊で発行される。以下が0号から15号までの雑誌の発行日である。

1969年6月12日	0号（創刊準備号）発行
1969年11月17日	1号（創刊号）発行
1969年12月1日	2号発行
1969年12月15日	3号発行
1969年12月29日	4号発行
1970年1月12日	5号発行
1970年1月26日	6号発行
1970年2月9日	7号発行（特集：自衛隊・この現実にクサビを！）
1970年2月23日	8号発行（特集Ⅰ：市民運動・自省と噴出のはざまで 特集Ⅱ：70年・停滞の季節をぬけ出るために）
1970年3月9日	9号発行（特集：教育を問いかえそう）
1970年3月23日	10号発行（特集：沖縄―本土へのアイクチ）
1970年4月6日	11号発行（特集：嗚呼日本万国大博覧会、京都べ平連編集）
1970年4月20日	12号発行（特集：言論表現の自由をわれらの手に！）
1970年4月25日	13号発行〔雑誌の形状が冊子からビラ・ポスターに変る〕
1970年5月	14号発行
1970年6月	15号発行

『週刊アンポ』は、創刊当初から1970年6月の日米安保条約の固定期限まで、半年間だけ資金が続く限り発行されることになっていた。短期間の発行ではあったものの、雑誌の内容や形状に変化があった。それは上記の通り、7号から12号にかけて一つの問題を集中的に取り上げる特集が、組まれるようになったことである。また13号からは、冊子状ではなくビラやポスターのような形状に変り、店頭販売ではなくデモや集会で、1部20円で手売りされた[17]（12号8頁）。

週刊誌の発行という新たな反安保運動の試みに対して、論壇やジャーナリズムの反響も大きかった。梅本克己や久野収、桑原武夫、中野好夫、野間宏、日高六郎ら大物の知識人から賛意の声が寄せられた（1号68～72頁）。他にも評論家の大宅壮一は「ゲバ棒の片棒かついで革命ゴッコするよりもいいよ。賛成だな。倒産してもいいなんて、敗北主義をいわないで、やってもらわんと困る」、「公明党に負けないように〝信者〟をふやしてもらいたいもんだな」と皮肉たっぷりに激励のコメントを送っている[18]。

2節　運営・編集体制と流通過程

それでは『週刊アンポ』は、どのような運営・編集体制の下に発行されていたのか。表向きの編集長兼発行人は小田であったが、実質的な編集長は合同出版編集長の野田祐次や『思想の科学』編集者の那須正尚、『中央公論』の編集者だった井出孫六ら雑

誌編集の経験豊かな熟練の編集者たちが務めていた。また、彼らに加え、東京ベ平連メンバーの吉川勇一（ベ平連事務局長）、久能昭、和田昌樹、阿奈井文彦、吉岡忍、室謙二、吉田泰三、山口文憲らが編集部員となり、その周りに「シロウト」の若者たちが集い、編集実務を担っていた。基本的には、編集業務に対する報酬はなかった[19]。編集会議は、週刊アンポ社で毎週開かれ、そこに高校生や浪人生、大学生、雑誌編集者、放送局員、新聞記者、教師など多様な経歴の市民が20人ほど集まり、雑誌の企画が話し合われた[20]（6巻72頁）。

一方で、出版社ではない市民運動グループが、継続的に週刊誌を発行するための最大の桎梏となったのは、資金の問題だった。実際に60年安保後に日本労働組合総評議会（総評）が鳴り物入りで創刊した雑誌『新週刊』（1961～62）は、4億円に上る赤字を出し、責任問題にまで発展していた[21]。この問題に対し、週刊アンポ社は1部100円の購読料とカンパで資金を集め、克服しようとした。資金集めの目標額は3000万円とされ、一口100万円の大口カンパ、1万円以上100万円までの中口カンパ、100円以上ならいくらでもよい小口カンパが設けられ（0号3頁）、『週刊アンポ』誌上や各地のベ平連の集会・デモを通じて、カンパを呼び掛けた。

次に『週刊アンポ』の流通過程についてだが、冊子状であった1号から12号までは、週刊アンポ社への予約購読と、大手取次5社を介して全国の書店で販売された[22]。0号は13万部が売れ、8万部を刷った1号と2号は、売り切れたという[23]。吉川は、このように出版取次を介して、書店で販売する方法を取った意図を「これまでの運動の手が届いていない所でも安保フンサイの人間の渦巻をつくりたいと考え」たと述べている（12号74頁）。

既存の週刊誌発行の方法からは、およそ常識はずれの『週刊アンポ』の運営・編集体制や資金の集め方は、多様な市民の自発的な参加と、全国的な緩やかな連帯を持ち味とするベ平連の強みを生かしたものであったといえる。それでは、このユニークかつ画期的な雑誌『週刊アンポ』の背後には、どのような思想が込められていたのだろうか。

3章　「1968」のベ平連と小田実の「アンポ」

1節　ベ平連の「1968」

「安保をつぶせ！」「沖縄を私たちの手に！」「日本を私たちの手に！」をスローガンとする『週刊アンポ』は、反安保の「人間の渦巻」をつくり出す「道具」「武器」「パン種」の役割を担い創刊された。誌名の「アンポ」は、反安保に結集する人々の力を意味した（1号表紙裏）。また具体的な行動目標が掲げられており、それは①『週刊アンポ』が「おたがいの運動のあいだの連絡機関とな」り、「日本中でさまざまな運動をかたちづくること」、②反安保の「渦巻のなかから、「ゼネスト」をつくり出すこと」、③「日本中にまきおこるさまざまな運動の渦巻のなかで、各種の分裂を大事のまえの小事に」することだった（0号3頁）。

以上の創刊の目的は、無論、小田実の手によるものである。それでは、小田が『週刊アンポ』に込めた思想とは何であったのか。それをみていく前に、小田がどのような問題意識から出発したのかを確認するため、『週刊アンポ』が創刊される前年の1968年に、ベ平連がどのような状況下にあったのかを、平井一臣の整理に基づきながら概観したい[24]。

1968年は、既存の体制に対する異議申し立てや革命が、世界中の若者たちから叫ばれた画期的な年だった。日本でも60年安保後の長い宿酔が破られる。既存の大学や学問の在り方をラディカルに問う大学闘争が激しさを増し、ベトナム戦争、70年安保、大阪万博、沖縄返還、公害といった様々な問題を巡って、社会運動も活発化した。それに伴い、体制化した「戦後民主主義」自体の変革を目指す全学共闘会議（全共闘）ら新左翼と、日本社会党、日本共産党及び総評といった既存の革新運動組織との対立が激化した。

「1968」の中で、1965年4月以来ベトナム反戦運動に取り組んできたベ平連も、高揚期を迎える。急進的な考えを持つ高校生や大学生の参加者が増えると共に、全国各地に地域ベ平連が新しく立ち上げられ、その数は最盛期には400ほどに上った。そして、運動の主眼もこれまでのベトナム「反戦」か

ら、70年安保を見据えた社会「変革」へと転回しつつあった。ベ平連は若者たちを軸に、拡大化・急進化の方向を見せ始める。このような傾向に対して、1960年代半ばにベ平連の立ち上げに関わり、どのような人でもデモや集会に加わることのできる穏健な市民運動の在り方を志向する年長の世代からは批判の声が上がった[25)]。それと同時に、先鋭化する運動から取り残される、運動を始めようとする人、あるいは始めたばかりの人に対して、どのようにその芽を摘み取るのではなく伸ばしていくのか、という問題が浮上する。例えば、田守順子は1968年の座談会で

> 東京の運動は非常に速く動いている。だけど事務所に来る地方からの手紙を見ていると、非常なズレを感ずるんです。まだ動いていない人だとか、ようやく動きはじめた人とか、それとの大きな開きを感じます。そういう人たちを切って捨てるなんてことを絶対にすべきじゃないんです。大きな問題ですよ[26)]。

と語っている。この発言に対して、ベ平連の講演旅行などで全国各地を回り、様々な若者たちとの交流を持つ小田も「そうだ。ズレがあるよ」、「この辺の事情をもう一度考えてみなけりゃいかんと痛感してるんだけどね」と応じている。1968年に顕在化した、運動の急進化を求める者と、運動経験の未熟な者との分化傾向の背景には、東京と地方の運動の地域間格差が存在していたことが、この座談会から読み取れる。

以上のようにベ平連は、世代間対立、地域間格差といった複雑な要因が絡み合う運動主体の分極化を抱え込みながら、70年安保に突入していくことになる。翌年の1969年は、小田やベ平連にとって、日本の社会運動全体の分裂状況や、ベ平連内部のズレをどのようにして埋め、日米安保体制を打破する「人間の渦巻」を全国各地に巻き起していけるかが課題となった。そして、それに対する思想的な応答が小田の「アンポ」思想であり、実践的行動が『週刊アンポ』の創刊だった。

2節　「ヌエ的状態」としての人間と運動

このような問題を抱えながら、ベ平連は70年安保に向けて、1969年に『週刊アンポ』を創刊する。小田は『週刊アンポ』の冒頭に毎号、論考を発表し、雑誌を思想的にリードする。本節と次節では、これらの論考を読み解くことで、『週刊アンポ』を貫く小田の反安保の理論、すなわち「アンポ」思想に迫りたい。

まず、前述したような運動の分極化状況を、小田は「とにかく生きる」立場と「人間として生きる」立場の対立として捉え直す。「とにかく生きる」立場の者は、日常生活の基礎である「生きる」ということを最優先する。それは、ともすれば「他人様のことなんか知らへんで。わいは、とにかく生きるんや」という意識になり、日常生活を生きることに直接関係しないベトナム戦争や日米安保条約がどうであろうと我慢することにつながる。これは、「とにかく平和に生きさえすればよい、他の国のことはともかく自分の国が戦争にまき込まれては困る、とにかくあの昔の悲惨はいやだ」という「戦後民主主義」「平和と民主主義」に立脚する「既成左翼」や年長者の平和運動の傾向と重なる。また、もう一つの「人間として生きる」立場の者は、このような「とにかく生きる」立場を否定し、「人間を人間たらしめている究極の原理」に立ち返り、人間存在を脅かすあらゆる制度や問題に立ち向かおうとする。その代表が、1960年代後半に現れた「新左翼」やベ平連に集う若者たちである。

小田は、「とにかく生きる」立場から「人間として生きる」立場へ「丘を越える」（脱走米兵R・ベイリーの言葉）必要があると述べる。その一方で、「ふつうの人間」が、「「人間として生きる」ことと「とにかく生きる」ことの両者を体内にもつヌエ的状態であることを認め、それに徹底することから運動をくみたてて行きたい」と主張する。そして、この運動主体の分極化を「ヌエ的状態」として肯定し、「ふつうの人間」による運動を形作ろうとする論理構成は、そのまま組織論にも適応される。対立する「人間として生きる」立場を取る「新左翼」と「とにかく生きる」立場を取る「既成左翼」との連帯を

計り、そこに「渦巻状のヌエ的状況をつくり出す」。それが、「安保フンサイ」のための「人間の渦巻」なのである（1巻3～7頁）。小田は、この「渦巻」を次のように説明する。

> その渦巻が、「安保フンサイへ・人間の渦巻を！」なのだが、これは、「安保フンサイ」という目的に対しては求心的な渦巻だが、運動の形状としては、外へ大きくひろがって行く遠心的な渦巻なのだ。自分だけのひとりよがりの集団に求心して行く渦巻ではなく、外へひろがり、ふつうの人間をそこにとり込んでいく渦巻――率直に言って、現在の運動にはさまざまな分裂がある。七〇年にむかって、おそらく私たちは、一つのみごとな統一体をつくって七〇年にはいり込んで行くわけには行かないだろう。同じスタート・ラインに立って、いっしょに走りだすというのではない。私は、この情勢をなげき悲しみはしない。それを逆に、積極的にとらえて行きたいと思う。どうしてか。それだけ数多く、多種多様な渦巻がつくり出されるからだ（1号7頁）。

小田において、運動の主体論、組織論二つの次元が交錯する反安保の「人間の渦巻」は、決して運動の急進化の立場に立つものではなかった。それは、「ふつうの人間」ならば誰しもが持つ弱さや日常性を切り捨てず、「スタート・ライン」に立ったばかりの人、まだ立ってすらいない人をも「アンポ」へと巻き込んでゆくことを重視する思想だった。そして、その多種多様な人々によって、大小様々な「人間の渦巻」が無数につくり出されていくことに期待を掛けたのである。

3節　「難死」から「アンポ」へ

それでは、なぜ「人間の渦巻」をつくり出し、日米安保体制を粉砕しなければならないのか。小田はその理由を、安保が単なる政治問題を超えて、人間存在自体に関わる問題であることに求める。

> 安保条約をつぶし、沖縄を私たちの手にとり戻し、それによって、日本の独立をとり戻す、いや、ひょっとするともっともかんじんなことは、私たちが安保条約の下で失なってしまっていた人間をとり戻す、とり戻すだけではなく、運動のなかで新しい人間をつくり出すことではないでしょうか。そうした運動、そうした人間の動きをまとめあげて、私は「アンポ」という名前で呼びたいと思います。安保条約が「安保」なら、それをつぶそうとするのが「アンポ」です（0号2頁）。

安保条約によって、日本はアメリカの戦争に巻き込まれている「被害者」の側面を持つ。しかし、一方で、現実に日本や沖縄の基地からベトナムに向かって、アメリカの空軍機が陸続と出撃している。この事実は、ベトナムの人々の立場から見れば、日本がアメリカの共犯者以外の何者でもないことを示す。つまり、安保条約の下で、日本はベトナム戦争に加担し、「アメリカと同じように、加害者になってしまっている」のだ。そして、安保体制による、このような「被害者＝加害者」のメカニズムがある限り、日本は「他の国の罪のない人間を押さえつけ、苦しめるという人間らしくない役割を背負わされ」続ける。それと共に、その加害性によって、自らをも非人間化している。この非人間的な「被害者＝加害者」の連鎖を断ち切り、人間性を取り戻すと同時に、新たな人間をつくり出していく運動が「アンポ」であり、『週刊アンポ』はそれを実現するための「武器」なのである（0巻2～3頁）。

また、この被害と加害の連関を断ち切るという考えは、ベ平連運動の思想的機軸となった小田の「被害者＝加害者」論を敷衍した議論だった[27]。この「被害者＝加害者」論は、1932年に生れた小田の戦争体験に根差しており、その思想的営為の根幹をなすものである。大阪で生れた小田は、敗戦直前に大阪大空襲を経験する。空襲の猛火の中を逃げ惑った小田がそこで見たのは、「「大東亜共栄圏の理想」とも「天皇陛下のために死ぬこと」とも何の関係もない、ただもう死にたくない死にたくないと逃げま

わっているうちに黒焦げになってしまった「難死」だった」[28]。国家の大義に殉ずる特攻隊の「散華」とは対照的な「無意味な死」「虫ケラどもの死」である「難死」[29]。この国家によって「難死」を強いられた人々は、「被害者」であった。しかし、「被害者」であることは同時に、彼らがまぎれもなく「戦争遂行者」であり、アジアの人々にとっては「加害者」であることを意味する。この「難死」から出発した「加害者と被害者がどこでどのようにして交錯し、葛藤し、混在し、あるいは、協力、共謀していたかを、自分の問題としてとらえなおす」[30]という認識が、「被害者＝加害者」論である。

小田によれば、日中戦争、アジア・太平洋戦争、そして戦後の日米安保体制下のベトナム戦争に至るまで、その底には常に「被害者＝加害者」のメカニズムが貫通し、人々を非人間化し続けてきた。人間が真の解放と自由を勝ち取るためには、この「人間をとらまえ動かしつづけてきた「被害者＝加害者」のメカニズムを」、不断に「ぶちこわし」続けなければならない。「そのぶちこわしの不断の過程」こそが、小田にとっての「永久革命」であり、その革命の一つが「アンポ」だったのである（5号10頁）。

4章　「人間の渦巻」をつくり出す戦略

1節　読者を引き付ける投稿と芸術

それでは、『週刊アンポ』誌上には、反安保の「人間の渦巻」をつくり出すためにどのような戦略が隠されていたのだろうか。最後にこの点を、読者の反応に目配りしつつ、雑誌の内容や形式について検討したい。

『週刊アンポ』は運営体制だけでなく、その内容も一般的な週刊誌とは大きく異なっていた。それを象徴するのが、目次・ノンブルがなかったことである。1号から6号までは記載されず、第三種郵便物に認可された7号から12号までは認可関係規定によりやむを得ず記載されるようになった（7号64頁）。その背景には「すみからすみまで読んでください」（1号表紙裏）との意図があった。また雑誌の内容も、反戦・反安保を主題とする、論考やルポルタージュ、座談会、小説、詩、マンガ、グラビア、フォークソングと何でもあり。そして何より特徴的なのが、それらの記事の中心的な書き手が、論壇で活躍する知識人ではなく、反戦・反安保運動に積極的に取り組んでいる無名の市民、労働者、学生だったことである。確かに『週刊アンポ』は、原稿料が出ないにもかかわらず、ベ平連に近い著名な知識人や芸術家が深く関与していた。その一方で、各地のベ平連メンバー及び学生運動、労働運動の活動家による寄稿や座談会、インタビュー、また読者からの投稿が数多く掲載されていた。

特に「あなたが書かないかぎり、『週刊アンポ』は出ない。つぶれる。それはたしかだ」（1号41頁）との誌上での強い呼び掛けからもうかがえるように、『週刊アンポ』は読者投稿に力を入れていた。なぜなら『週刊アンポ』を読み投稿すること自体が、運動の一部であると考えられていたからである。京都ベ平連が、創刊を受けて京都での運動の拠点作りのため、1969年6月26日に開いた「調整委員会」のメモには、その考えが明瞭に現れている[31]。

アンポフンサイのために
人間の渦巻を！
買う→売る

行動する→考える→書く→
作る→読む

＞ 人間の渦巻

『週刊アンポ』のねらいは、読者の内部で、雑誌の購読を契機に「買う→売る」、「行動する→考える→書く→作る→読む」という一連の循環がつくり出されることにあった。この循環過程こそが運動であり、それの延長にあるのが「人間の渦巻」だったのである。

それに加えて、『週刊アンポ』は、少しでも多くの人に手に取ってもらうために、表紙のデザインなどビジュアル面においても徹底したこだわりをみせた。『週刊アンポ』の表紙は、粟津潔、横尾忠則、赤瀬川原平ら新進気鋭の前衛芸術家たちがデザインした。例えば粟津による1号の表紙は、当時の若

者たちに衝撃を与えたようだ。1953年生れの四方田犬彦は、『週刊アンポ』の創刊を次のように回想している。

> わたしは憶えている。1969年11月、高校2年生だったある日のこと、誰かが「出たぞ！出たぞ！」と言いながら、薄っぺらい雑誌を高校の教室にもってきた日のことを。／〔……〕表紙には赤やピンク、黄、臙脂、青、緑といった極彩色で、人間の顔とも指紋ともつかない不思議な渦巻き模様が描かれていた。〔……〕じっと眺めていると、眩暈がしてきそうな表紙だった[32]。

もっとも芸術的側面で読者を魅了したのは表紙だけではなかった。『週刊アンポ』には毎号、小説、グラビア、詩、マンガ、フォークソングが掲載され、どれも当時を代表するアーティストたちが手掛けた(表1)。四方田は1960年代末を「政治的高揚と芸術的前衛が互いに目配せをしながら、恐ろしい速度で世界を駆け抜けていった時代」[33]と述べるが、『週刊アンポ』は、まさにその時代の雰囲気を的確に捉えた雑誌であったといえる。このように『週刊アンポ』は、その高い芸術性でまず読者の感性に訴え、投稿を通じて反戦・反安保の運動に巻き込んでゆこうとした。

2節　運動課題の提起と断絶の架橋

『週刊アンポ』は、大手の新聞社や出版社が発行する週刊誌とは異なり、広告料ではなく、購読料と

表1　『週刊アンポ』に関わったアーティスト

	表　紙	小　説	グラビア	詩	マンガ	フォークソング
0号	粟津　潔		朝倉俊博他			南大阪べ平連 作詞・作曲
1号	粟津　潔	大江健三郎、中村　宏 絵		片桐ユズル	福地泡介	岩谷時子 作詞、いずみたく 作曲
2号	横尾忠則	高橋和巳、赤瀬川原平 絵		秋山　清	園山俊二	永　六輔 作詞、いずみたく 作曲
3号	井上洋介	小松左京、伊坂芳太良 絵	フォート・ゲリラ	富岡多恵子	林　静一	なだいなだ 作詞、いずみたく 作曲
4号	滝谷節雄	城山三郎、辰巳四郎 絵		富岡多恵子	勝又　進	小黒　弘 作詞・作曲
5号	赤瀬川原平	日野啓三、山口はるみ 絵		小野十三郎	秋　竜山	たになをと 作詞・作曲
6号	木村恒久	寺山修司、横山　明 絵		風間道太郎	滝田ゆう	吉田正敏 作詞・作曲
7号	辰巳四郎	黒井千次、賀川　忠 絵	福島菊次郎	G.スナイダー、片桐ユズル 訳	佐々木マキ	キング・ビー・フォーク 作詞・作曲
8号	柳生弦一郎	深沢七郎、粟津　潔 絵	編集部	長谷川修児	ふじ沢光男	ビタミンC 作詞、たになをと 作曲
9号	池田　稔	三浦浩樹、東　君平 絵	岸根反戦放送局	鈴木志郎康、長　新太 絵	ジョージ秋山	たになをと 作詞・作曲
10号	片山　健	加賀乙彦、和田　誠 絵	小原貴和	吉田欣一、霜月象一 絵	千葉督太郎	中川五郎 作詞・作曲
11号	長　新太	島尾敏雄、片山　健 絵	京都アンポ社	寺島珠雄、清水健造 絵	森町長子	すずきめいこ 作詞、ももたにみねなを 作曲
12号	佐々木マキ	大原富枝、中川治子 絵／辻　邦生、栗原達男 写真	吉田勝美		高　りょう	山内　清 作詞、中川五郎 作曲
13号					手塚治虫	
14号	粟津　潔	大江健三郎			赤瀬川原平	
15号		小田　実				

カンパを元手に発行されていたため、より自立的な編集が可能となった。創刊準備号で「世は大量消費の時代。だが、この雑誌は、どこまでも反消費の雑誌である。資本主義の消費の仕組みにしばられているために、他誌の書けない問題を、週刊アンポは、どしどしとりあげ、たたいてゆく」（0号表紙裏）と宣言している通り、政府や企業に近い一般の新聞や週刊誌が扱いにくい政治問題を追及した。

そこで取り上げられた問題は、日米安保体制批判やベトナム反戦だけに止まらず、多岐にわたった。一例をあげれば、政府によるテレビ局への言論圧力の実態、自衛隊内で反安保を呼び掛け逮捕された小西誠三等空曹に対する支援、空港建設に反対する三里塚闘争、日米安保体制及び日本の経済進出がアジア諸国に与える影響、沖縄の米軍基地及び返還問題、大阪万博批判、岩国基地での米兵の反抗など、1960年代末に噴出していた様々な問題が扱われた。政治問題以外にも、羽仁五郎「歴史とは何か（聞き書き）」（4号）や真木悠介「ファシズム断章――われらの内なる〈自警団〉」（5号）、真継伸彦「三島由紀夫批判」（2～6、9、11～14号）といった当時、若者たちから注目されていた知識人による評論も掲載されていた。一風かわったところでは、マリファナやLSDの体験を取り上げた記事（5号）もあり、アメリカのヒッピーカルチャーの影響が見受けられる。また、内部資料や証言を基に、警察などの暴力や腐敗を暴く「アンポドキュメント」（1～3号）、「告発」（2～5、7、10号）も連載されていた。

他にも、読者に市民運動の実践的な方法を伝える記事も多かった。共産党での活動経験もあり、政治運動の方法に熟知した吉川勇一による「市民運動入門」（1～12号）や、「アンポ講座」（0～1、4～5、7～10、13号）といった連載は、デモや集会に関わる具体的なテクニックや警察への対処法をこと細かに解説した。このように政財界による報道機関に対する圧力が苛烈を極めた1960年代後半において[34]、『週刊アンポ』は読者に多様な政治問題や運動課題を提起する重要な役割を果したといえる。

また『週刊アンポ』は、連載を通じて、前述したような運動における地域間、党派間の断絶の架橋を試みた。「新日本案内・デモで日本をまわろう」（0～10号）は、北摂・宮崎・新潟・金沢・浜松などの地域ベ平連の定例デモコースを挿絵と共に紹介し、それぞれの地域での取り組みを伝え、読者に参加を呼び掛けた。実際にこの連載をもとに、札幌―池袋―福岡を巡り、各地でデモに加わった者もいたようだ（10号5頁）。一方、毎号巻頭に置かれた「アンポ街へ！」（0～11号）は、反安保の運動を展開する全国の地域ベ平連及び、社会党・公明党といった政党、全共闘・革マル派・社学同ら学生組織の活動予定・公判日程を、2週間ごとに掲載した。同じ政治目標を掲げながらも、普段は対立している政治組織を一堂に並べ、誌上で大同小異を表現した。このように地域や党派を超え、様々な人間を行動へと駆り立てる工夫が、『週刊アンポ』には散りばめられていた。小説家の石川淳は『週刊アンポ』を「活字のデモが行進する」と評した[35]。それぞれの個性を放つ多様なこれらの記事が「活字のデモ」を形作っていたのである。

3節　「共感」から生れる「読者共同体」

さらに「人間の渦巻」をつくり出す上で、重要な役割を期待されていたと考えられるのが、読者投稿欄と読者集会である。

『週刊アンポ』には、毎号、雑誌の冒頭に「私はやるから君もやれ」（1～12号）という読者投稿欄が設けられていた。「このページは、アイデアの倉庫です。あらたな行動のアイデアを保存し、いろいろな人びとに、行動の提案をする――そのために使ってください。なるべく短かくお願いします」（1号9頁）との呼び掛けに応じて、読者から寄せられた活動報告や新しい運動の提案、『週刊アンポ』への要望、ベ平連の結成やデモへの参加の呼び掛けといった内容の文章が掲載された。それだけではなく、読者からの投稿の中には、運動に絡む悩みや不安が赤裸々に吐露されたものが多数あった。

> ぼく自身はどうかといえば、いかなる行動をとれば良いのかと始終まよって結局、何らの

行動もとれない。〔……〕社会の諸矛盾に対して感ずる怒りを表に出さないということは、その諸矛盾を認めることになります。ぼくは怒りを怒りとして表わすのをおこたってきたことに対して反省しなければならないのです（仙台市・学生・佐々木力「何と答えればいいのか」2号2頁）。

社会全体を覆う種々の矛盾や不条理に怒りを覚えつつも、運動の在り方などに対する悩みが先行し、行動に踏み出せないことを自己批判するこの仙台の大学生は、これに続いて「しかし、ぼくのような人間を含むような運動体がなかったことも確かだ！」と既存の運動が、自身のような思いを抱える者を包摂し得ないことに不満を述べている。ここからは、彼が何とかしてこの煩悶を突破し、運動への参画の方途を『週刊アンポ』に求めていたことがうかがえる。

他にも、同様の悩みを綴った便りが、若者たちから数多く寄せられていた。またこのような内容の便りは、浪人生や大学生だけでなく、労働者や教師からも寄せられていた。それは「小生の会社は、革新運動或いは反戦運動に対するしめつけが厳しく、安保のことさえ、ほとんど話題にならない現状です」（京都市・会社員・野田公彦「くちコミで仲間を」1号8頁）、「何か、やらなくてはと焦りながらも、現教組、とくに私の学校では、ベ平連に理解は乏しいようです。一人から始めなくてはと思いながらやはり、仲間がいないために何事にも消極的になりがちです」（大阪市・教師・安岡博志「まず仲間から」1号9頁）といった声だった。反戦・反安保の運動に懐疑的な会社や学校の圧力に対し、そこに属しながらもどのような抵抗ができるかという組織人特有の重い悩みが、綴られていた。

もっとも運動に関わる悩みを告白的に綴るこのような投稿に対しては、批判の声も存在した。「「私はやるから君もやれ」のページは、ものすごくいいと思う。そのうち俺も出す。しかし、悩んでる奴の告白じみたものは落とせ。俺もそうだが。そこには連帯はない。共感だけだ」（東京都足立区・佐藤晃「グットくだけて硬いヤツ」3号4頁）。しかし、この批判には読者から再批判が寄せられた。大阪のある浪人生は

同情から連帯は決して生れない。しかし共感からは生れ得る。一人の人間が、自分のもつ弱さを自覚、吐露する時、そこに共感を見い出す読者と彼とは連帯できるはずであり、連帯しなければならない。弱さは単に欠点のみにとどまるものではない。／上の意味により、3号「私はやるから君もやれ」にのった、悩んでいる奴の告白じみたものは落とせうんぬんの意見に異議を申し立てる（大阪・浪人・山西孝雄「異議あり」6号3頁）。

と述べ、読者同士が互いの「弱さ」を率直に語り合う時に生れる「共感」こそが「連帯」の第一歩であると主張している。他にも、悩みや不安を抱える読者に向けて、実体験を交えた励ましの声が掲載されていた。

そして、この十一月、生まれて初めてデモした。〔……〕デモの中では一人ぼっちで恥かしかったけれど終ったときうれしかった。そして佐藤さんの訪米のとき、生まれてはじめてジグザグデモをした。機動隊にひどくド突かれたけど、これもうれしかった。／ここで全国の書斎族にアピール。書を捨てて、デモに出よう。デモは楽しいよ。たまには、車道から歩道を見よう！！（京都市・浪人・中島憲一「書を捨てて、デモに出よう」3号2頁）

ぼくみたいに、いつも一人で参加している人がいるのではないかと思いますし、グループに入っていない人で、参加しようか、どうしようか、まよっている人が沢山いるのではないかと思い、ぼくみたいなものもいるのを知れば、その人たちも参加する気持になると思ってこれを書きました。／一人ぼっちで、どうしようかまよっている人は、どんどん参加し

ましょう（東京・一匹素浪人「一人でいる人へ」6号2頁）。

ここには、様々な悩みを抱えながらも、行動に踏み出した喜びと決意が書かれている。自らの「弱さ」に苦悩し、運動への参画に躊躇する多くの読者にとって、前述した小田の思想が、強く訴えかけたことは想像に難くない。しかし、読者投稿欄を通じて出会った、自身と同じような思いを抱えながら、それにもかかわらず、行動に踏み切った読者の存在は、彼らにとって大きな励みとなったはずだ。

このように「私はやるから君もやれ」には、運動経験の程度を問わず、日々の生活から溢れ出した読者の多様な声が掲載されていた。そこには、運動に踏み出せずにいる、あるいは踏み出したばかりの「弱さ」を抱えた孤立する読者同士が、誌上でのコミュニケーションを通じて、互いに励まし合い「共感」し合い「連帯」を模索する「想像の読者共同体」[36]が形成されていたのである。

しかし、この読者共同体は、あくまで誌上で形成された想像の共同体に過ぎない。『週刊アンポ』にとってより重要だったのは、この形作られた「想像の読者共同体」をどのように具体化・実体化させ、運動体をつくり出していけるかだった。その機能を担うことを期待されたのが、小田が「人民議会」と呼んだ『週刊アンポ』の読者集会である（0号3頁）。読者集会は、1969年7月20日に札幌・東京・京都・大阪・福岡で開かれたのを皮切りに（0号裏表紙）、地域べ平連がそれぞれ主催し、全国各地で開かれていた。実際に「アンポ街へ！」「私はやるから君もやれ」にも、読者集会の開催を告知する投稿が載せられている。以上のように『週刊アンポ』は、読者投稿欄と読者集会によって、多様な人々を包む「新しいデモクラシーの広場」をつくり出そうとした。

5章　おわりに

『週刊アンポ』は、反安保統一行動に併せ1970年6月に15号をもって終刊する。予定通りの終刊ではあるものの、発行部数の低迷も関係していると思われる[37]。哲学者の鶴見俊輔は、最終号に載った「おわりにひとこと」において、終刊が「かつての両国の川開きのように高く花火を打ちあげて見物人をあつめる能力。センセーションをおこす能力」を持っていたべ平連の終りを象徴しているとして、「われわれの手で出してきたこの週刊誌の終りは、ひとつの時期の終りをつげている」と述べている（15号）。鶴見の予感通り、『週刊アンポ』が発行されていた1969年から1970年にかけては、ちょうどべ平連が、70年安保を境に高揚期から後退期へと移行する時期であった。同時に、後退期にもかかわらず、新たな展開も見られた。それは地域べ平連が、東京のべ平連の運動に呼応するのではなく、それぞれの地域に根差した政治課題を発見し、それに取り組んでいく運動形態に変り始めたことである[38]。全国規模の統一的運動から地域独自の運動へと移り行く、まさに模索の時期にあって、『週刊アンポ』はべ平連が打ち上げた最後の大きな「花火」であったといえるかもしれない。

この時期の状況をより子細にたどれば、70年安保を目前に控えた1968、69年は、運動に対する地域間や世代間の隔たり、反戦・反安保勢力の分裂、そして運動主体の分極化など様々な断絶が顕在化し、それをどのように克服し、全国的な反安保の運動をつくり出せるかが問われていた。この困難な問題に対して、小田やべ平連は、週刊誌というメディアの特性を最大限に生かすことで、大きな反安保の流れをつくり出そうと考えた。

『週刊アンポ』は、読者に多様な運動課題を投げ掛けると共に、党派間の対立を乗り越え、地域と地域の運動の連帯を図った。また人々が日々の生活の中で抱いた反戦・反安保の思い――それは小さく弱々しいが――を、具体的な行動へと結び付け、「アンポ」の「人間の渦巻」をつくり出そうとした。市民運動と雑誌メディアとの間に緊密な連携関係を構築し、その相互作用の中から新たな運動を形成しようと試みたのである[39]。このような事例は、近年の社会運動とソーシャルメディアとの相関性を考

える上でも極めて示唆的である。『週刊アンポ』は、半年間という極めて短い期間の試みだった。しかし、その射程は、遠くまで及んでいる。

【追記】

本稿は、立命館大学国際平和ミュージアム平和教育研究センター主催の第10回メディア資料研究会（2018年10月11日）における報告を再構成し、加筆修正をしたものである。また本稿をまとめるに当り、2019年9月12日に立教大学共生社会研究センターで資料調査を行った。その際に御対応いただいた平野泉様には、この場を借りて謝意を申し上げる。

【注】

1) 神島二郎「人間の渦巻」『人心の政治学』評論社、1977年、306頁、初出1969年6月19日。

2) 『週刊アンポ』は、立命館大学国際平和ミュージアムメディア資料室にキャビネット資料として、0～13号が所蔵されている。

3) 「17日に創刊　週刊アンポ」『朝日新聞』1969年11月9日付。

4) ベ平連の主な先行研究についてだが、東京ベ平連を中心とする総論的な研究として、トーマス・R・H・ヘイブンズ、吉川勇一訳『海の向こうの火事――ベトナム戦争と日本一九六五―一九七五』（筑摩書房、1990年）、道場親信『占領と平和――〈戦後〉という経験』（青土社、2005年）IIがある。また近年、平井一臣「戦後社会運動のなかのベ平連――ベ平連運動の地域的展開を中心に」（『法政研究』71巻4号、2005年）を契機とする地域ベ平連研究が精力的に進められている。主にベ平連こうべを対象とする黒川伊織「第15章ベトナム反戦から内なるアジアへ――ベ平連こうべの軌跡」（出原政雄編『戦後日本思想と知識人の役割』法律文化社、2015年）、沖縄ベ平連を対象とする大野光明『沖縄闘争の時代一九六〇／七〇――分断を乗り越える思想と実践』（人文書院、2014年）、福岡ベ平連を対象とする市橋秀夫「日本におけるベトナム反戦運動史の一研究――福岡・十の日デモの時代」1～3（『日本アジア研究』11～13号、2014～16年）があり、ベ平連＝東京に回収されない、それぞれの地域で多様に展開されたベ平連運動の諸相に光が当てられている。

5) 服部訓和「「渦巻」と「コミュニケーション」――雑誌「週刊アンポ」について」『茨木女子短期大学紀要』39号、2012年、18頁。

6) 小田実「69年のベ平連　小田実氏にインタビュー」『ベ平連ニュース』40号、1969年1月、2頁。小田実は、『週刊アンポ』の構想を「おそらくその前年〔1968年〕の秋か冬あたりには考え出していたことであったにちがいない」と回想している（小田『「ベ平連」・回顧録でない回顧』第三書館、1995年、131頁）。

7) 小田前掲「69年のベ平連　小田実氏にインタビュー」2頁。小田はこのインタビューで、日米間に反安保の国際的連帯を形成したいと述べているが、実際に『週刊アンポ』と同時に月刊の『英文AMPO』も発行された（1号17頁）。また『英文AMPO』の編集は、武藤一羊を中心に進められていた（小中陽太郎『私のなかのベトナム戦争――ベ平連に賭けた青春と群像』サンケイ新聞社出版局、1973年、156頁）。

8) 「時の動き　反安保めざす市民運動　ベ平連の七〇年取組み」『朝日ジャーナル』1969年2月16日号。吉川勇一「70年安保と取組むベ平連――「ベ平連全国懇談会」の討論」『月刊労働問題』1969年4月号。

9) 「ハンパク」は、南大阪ベ平連・関西ベ平連のメンバーを中心に構成されたハンパク協会が準備を進め、1969年8月7日から11日にかけて大阪城公園で開かれた。詳しくは、本誌のハンパクプロジェクトメンバー「博物館の資料研究〈戦後社会セクション〉」を参照。

10) 「反アンポ雑誌創刊までの長い陣痛」『週刊言論』1969年11月26日号、11頁。

11) 「すべて型破り「週刊アンポ」発刊」『週刊読売』28巻28号、1969年6月、33頁。

12) 『ベ平連ニュース』45号、1969年6月、8頁。「「週刊アンポ」寄付者名簿　大江健三郎百万円也など」『週刊文春』1969年6月30日号、140～142頁。『ベ平連ニュース』46号、1969年7月、9頁。

13) 「売れ行き好調の『週刊アンポ』創刊号」『週刊読売』1969年11月28日号、26頁。

14) アンポ社「あなたにおねがい！」『ベ平連ニュース』47号、1969年8月、8頁。

15) 「アンポ社訴訟をおこす　市民的諸権利に対する侵害について」『ベ平連ニュース』50号、1969年11月、3頁。この事件に対してベ平連は、不当な捜査であり市民的権利の侵害であるとして、警視庁公安部外事第一課の警察官らを相手取り、東京地方検察庁に訴訟を起した。なお、以後も週刊アンポ社に対して、警察の妨害は執拗に続いた。1970年2月上旬には、再び同課の警察官が『週刊アンポ』を印刷するカタログ社を訪れ、自衛隊を特集した発売前の7号の校正ゲラの提出を求め、それが拒否されると見本3部を持ち帰る事前検閲に等しい事件が起った（10号11頁。サテライト「まかり通る「事前検閲」『週刊アンポ』ゲラ提出事件」『朝日ジャーナル』1970年4月5日号、53頁）。

16) 「原稿料タダで『週刊アンポ』に書く人たち」『週刊ポスト』1969年11月25日号、135頁。前掲「反アンポ雑誌創刊までの長い陣痛」11頁。

17) 13号から雑誌の形状が冊子からビラ・ポスターに変り、頒布の方法も店頭販売から集会・デモでの手売りに変った理由を吉川勇一は「取次店を通じて店頭に並べるというのは、『週刊アンポ』が出たら大いに売りまくり、運動を広げようと待ちかまえていた多くの人たちの期待をはぐらかす結果になったと思います。そこで、自己批判しまして、十三号からは内容も一新し、ポスター・スタイルでタダにしました。これなら、集会やデモや街頭で、どんどん手渡せると考えたわけです」と述べている（「「経営不振じゃないんだぞ」「週刊アン

ポ」が廃刊」『週刊読売』1970年7月3日号、28頁)。

18) 前掲「原稿料タダで『週刊アンポ』に書く人たち」136頁。

19) 小田は「井出氏にはまったくのナミダ金を受けとってもらっていたが、あとはすべて例によって無料どころかもち出しの労働であった」と回想している(小田前掲『「ベ平連」・回顧録でない回顧』134頁)。

20) 滝谷節雄「本をたずねて　週刊アンポ編集室」『朝日新聞』1969年11月27日付。

21)「状況を切開く雑誌 『週刊アンポ』と『共和国』」『朝日ジャーナル』1969年6月29日号、51頁。青地晨「「新週刊」の夜と霧」『中央公論』1963年7月号。

22)「反安保の雑誌『週刊アンポ』ただいま発売中！　これが創刊号だ」『出版ニュース』1969年11月下旬号、15頁。

23) 前掲「売れ行き好調の『週刊アンポ』創刊号」26頁。

24) 平井一臣「一九六八年のベ平連――生成・共振・往還の運動のなかで」『思想』2018年5月号。平井は、地域レベルの運動も視野に入れながら、ベ平連の9年間を次のように区分する。①「ベ平連の運動が登場し、地域のなかからそれに呼応する動きが始まる時期」(1965～67年末)、②「ベ平連の運動がヴェトナム反戦から「変革」という問題に運動の課題を移行させ、また、いわゆる地域ベ平連が急増した時期」(1967末～69年)、③「運動が次第に沈静化し、地域ベ平連の活動のあり方をめぐって方向性が模索される時期」(1970～71年)、④「ベ平連の解散に向けての議論が始まり実際に解散に至る時期」(1972～74年)。『週刊アンポ』発行は、②から③の時期に当る(平井前掲「戦後社会運動のなかのベ平連」358頁)。

25) 小熊英二『1968〈下〉――叛乱の終焉とその遺産』新曜社、2009年、365～387頁。

26) 井上澄夫・小田実・北沢恒彦・小中陽太郎・高橋武智・田守順子・鶴見俊輔・鶴見良行・福富節男・古山洋三・武藤一羊・吉川勇一「【座談会】デモ・沖縄・日本人米兵・ベ平連――京都会議後のベ平連の活動と展望」小田・鶴見俊輔編『反戦と変革――抵抗と平和への提言』學藝書房、1968年、308頁。平井前掲「一九六八年のベ平連」79頁。

27) 大野光明は、小田の「加害者・被害者論」が、ベ平連の取り組みから生れた、ベトナム戦争に反対し脱走した米兵を支援するジャテック(反戦脱走米兵援助日本技術委員会)の運動にも影響を与えており、「米兵との連帯を可能とする思想であった」と指摘する(大野「越境する運動と変容する主体――ジャテックの脱走兵支援運動・米軍解体運動を中心に」『Core Ethics』4巻、2008年、42～43頁)。

28) 小田実「平和の倫理と論理」『「難死」の思想』岩波現代文庫、2008年、48～49頁、初出1966年。

29) 小田実「「難死」の思想」同前、4頁、初出1965年。

30) 小田前掲「平和の倫理と論理」71頁。

31) ほ「京都アンポ社のためのイメージ」1969年6月26日、ヴェトナムスクラップ7(ファイル番号：0210)、吉川勇一氏旧蔵ベ平連関連資料(コレクションID：S01)、立教大学共生社会研究センター所蔵。

32) 四方田犬彦「グラフィックス――異端とエロス」同編著『1968［1］文化』筑摩選書、2018年、52頁。

33) 四方田犬彦「〈1968年〉には何が起きたか」同前、30頁。

34) 根津朝彦『戦後日本ジャーナリズムの思想』(東京大学出版会、2019年)第二章を参照。

35) 石川淳「文林通言」『石川淳全集　第15巻』筑摩書房、1990年、325頁、初出1970年2月26日。

36)「想像の読者共同体」については、福間良明『「働く青年」と教養の戦後史――「人生雑誌」と読者のゆくえ』(筑摩選書、2017年、26頁)などを参照。

37)「小さく見えまぁーす　〝ビラ〟になった「週刊アンポ」」『夕刊フジ』1970年4月28日付。小田前掲『「ベ平連」・回顧録でない回顧』532頁。

38) 平井前掲「戦後社会運動のなかのベ平連」367～368頁。本稿注24を参照。

39) 市民運動と雑誌メディアは歴史的に深いつながりがある。鶴見俊輔は、1960年代の市民運動の「型」をつくり出したのは、1930年代後半における日本共産党の指導から独立し、「軍国主義が市民生活をどのように歪めていくかに対して敏感に反応し」た京都の『世界文化』(1935～37)と『土曜日』(1936～37)であったと指摘している(鶴見『戦後日本の大衆文化史』岩波現代文庫、2001年、204～208頁、初出1984年)。